

が完了し、金沢大学助教授の職を辞されます。三十七、八年清沢先生ご生誕百年の節目を迎え、仏教使節団に加わり、「三十七年十月一日、羽田を発ち（中略）地球を一周して、三十八年四月二十日、羽田に帰りつく」長旅は、「原爆被災者の悲願を結晶して、広島に梵鐘をつくりたい」との発願に結びつきます。それは新天地広島への移住を意味しますから、地元金沢からは反対の声も上がる中、藤原鉄乗師から「どんな訳で、広島へ出るのか」と尋ねられます。その際的一幕、西村師の門出を決した問答を、『藤原鉄乗選集』第五卷（法藏館）の月報に記された、西村師の一文「門出の一言」から引用します。

私は、暁鳥先生の憲法制定のご志願（十七条憲法を鑑とした自主憲法の制定）と、新しい世界は広島原爆から始まったこと。

外遊中、広島で梵鐘をつくることから、志願実践の第一歩が始ま

るとの感得が、インドであったことを、お話ししました。

聞き終わって、

「それで、いいじゃないか」

秦〔菊枝〕さんの顔を見て、にっこりされました。

私の第三の門出は、鉄乗先生のこのひと言で定まったのです。

「梵鐘」とは、昭和三十九（一九六四）年九月二十日、広島平和記念公園内に建立された「平和悲願の鐘」を指します。ギリシアアルフォイの神殿に刻まれた「汝自身を知れ」の語と国境のない世界地図、そして「無量寿経」の一節が刻銘されています。

梵鐘の作者であった香取正彦氏（鑄金工芸作家・人間国宝）の著書『鑄師の春秋』（日本経済新聞社）には、「金沢大学の助教授であった西村見晁という人がある日突然私の家へ訪ねて来られ「広島に平和祈願の鐘